

ジンメルの女性論の研究（六）——完

石 塚 勝 雄

十九の二

つぎは、女は習俗の世界に生きることに於いてのジンメルの叙述である。

『^(註一)そして最後に、社会集団の生活形式以外の何物でもない習俗、すなわち、社会が自己保存のために法にまで形成した仕組みというものが、女性の性質のきわめて固有な本能に由来しているように見えるのである。女は「習俗に向つて努力する」のだが、習俗とは男の活動をしばしば邪魔するものなのである。しかし女性の本質には、習俗に皮膚のように密着している。男にとっては習俗のはるか彼方^{（外側）}にある自由を、女は習俗の中に見出すのである。それというのも、自由とは、われわれの行動の規範がわれわれの固有の性質の表現であること、とよく言われている通りだからである。』^(註二)

女は習俗にならずむ・女の世界は習俗である、とはジンメルをまたずとも、よく言われていることである。つまり、思想的にはもちろん、できれば現実の生活でも、「世間並み」ということが女性の金科玉条なのである。これは女が世間から物事を学ぼうとする態度となつても現われ、それについてルソーは「世間は女の書物である」^(註三)と天才的名言を

吐いている。ショーペンハウアーによれば、女は「最も治し難い俗物 (Philister) である」と侮蔑的に述べている。^(註四)
J・S・ミルは「妻とは平凡な世論の支持者である」と言っている。^(註五)これは一面、母性から来るものなのかも知れないと筆者は考えている。つまり、妻は夫に対して「風変わりな真似はしてくれない、子供の将来が危険にさらされるから」というのであろう。このことがジンメルによれば『女性の本質には、習俗が皮膚のように密着している』という簡潔な表現で与えられているのである。

さてジンメルによれば、男は習俗 (Sitte) に拘束されるところには自由はあり得ないと考え、習俗から解放された世界に自由を求める行き方であるのに対し、女は習俗の中に自由を見出すと言う。そこで、ここで言う自由 (Freiheit) の意味が問題となってくるのであるが、自由の用語例にはおよそ三種類ある。まず、社会思想としての自由主義が実現しようとしている自由で、通常「社会的自由」 (social liberty) または「市民的自由」 (civil liberty) と呼ばれるものである。ジンメルがここで言う自由とはこの意味の自由ではない。第二は、哲学上いわゆる意志決定論に對立するものとされる意志自由論における自由である。この言わば哲学的自由も、ここで言う自由ではない。第三は、通常「道徳的自由」 (moral liberty) と呼ばれるもので、これがジンメルがここで言う自由の意味である。この自由を説いたのは、周知の通り近世ではルソー・カント・リップス (Theodor Lipps) などであるが、その中のリップスによる道徳的自由の定義「自己の活動が自己の本質と一致すること」が、前掲ジンメルの定義と大変よく似ていることから、このことが分るであろう。このようにして、女が習俗の世界に生きることは、直接に女性の本質につながっているので、そのまま女は自由しかも自由の究極の目標である道徳的自由を体得しているわけである。この意味において、女は男よりも悩みもなく、習俗の世界に安らうているのである。

つぎは、女の「性」にかかわる名誉の尊重と、それが女性の運命につながる様相についてのジンメルの叙述である。『正にこの意味において、習俗への志向は性にかかわる名誉の無条件的な尊重というところまで上って行く。

性にかかわる名誉はすべての他の名誉よりも一般的なものであり、特定の社会的身分にだけ属するものではない。

さてしかし、それが同時にきわめて一身上の事柄として感じられるということは、性にかかわる名誉を辱しめた人それ自身は、他の名誉を傷つけた人の場合よりも取るに足らないことだという点に外部に現われている。凌辱事件が起きた際には、その重大性を査定するために、「誰が貴女を辱しめたのか」と関係者は尋ねるにちがいない。しかし女性としての名誉の損失は、いわば独在論的なものであって、つまりその価値的意味については他との相関関係とは無縁なものである。この凌辱されたという事実は、要するに婦人にはきわめて一身上の事柄に相当するわけなので、誰のせいであるかなどということは、もはやかなりどうでもよいことなのである。そしてこれが、またもや、女性の運命の形而上的様相と経験的様相との間の広汎な矛盾を示している。換言すれば、女性的価値の男性的原理に対する内的独立性と同時に外的依存性を示しているのである。^(註六)』

名誉とは、人を相手にし、世間を相手にするという前提の上に成立することで、言わば相對世界の事柄である。前項で述べたように、女が習俗の世界に安住していることは、もちろん人を相手にし世間を相手にしていることを意味する。したがって、名誉は女の重大関心事である。ルソーも「世間の人たちがどう思うか」ということが、男性道徳の墓場であり、女性道徳の王座である」と明快に述べている。^(註七)ジンメルは、このようにして習俗から名誉に移り、名誉の中でも、ここでは性にかかわる名誉 (Sexualre) を取りあげる。ここで言う性にかかわる名誉とは、夫婦関係以外の性関係の中、特に男にだまされたとか、手ごめにされたとか、強姦されたとかの場合を指し、とりわけ未婚女性の処女性の喪失 (日本流に言えはいわゆる疵物きずにされること) の場合を指しているものようである。しかし、その論旨は、後述のように、女が不本意な相手とでも結婚する運命に追い込まれる場合をも包含するものと考えられる。ところで、性にかかわる名誉は男性ではなく女性にだけかかわる名誉なのであるから、種々の名誉の中でも、女性にとって最高の価値を持つものであり、したがってこの名誉の喪失は女性にとって致命的であり、そこでこの名誉

の無条件的な尊重というところまで高揚するわけである。妙齡の娘を持つ母親が、これに対して神経質的な配慮をする所以もここから説明されるであろう。しかもこの名誉は、貴族とか名門とか総じて特権階級的な名誉などと違って、ジンメルの言う通り、社会的身分などを問わない、女であるかぎりどんな女も持っているきわめて一般的な名誉なのである。つぎにジンメルによれば、この名誉はきわめて一身上の事柄 (Allerpersönlichste) として感じとられるという。そのことの外部に現われた証拠として、他の名誉を傷つけた場合はその張本人が誰であるか、またその人格が大いに問題にされるのであるが、この名誉を傷つけた際の相手はさして問題にならないという事実である。その理由としてジンメルは、この女性としての名誉の喪失は『いわば独在論的なもの』 (etwas Solipsistisches) で、他との関連において意味づけられたり価値づけられたりされる筋合いのものではないと、根源的な、むずかしい説明をしている。しかし、つぎのような社会理論的説明も同時に可能であろう。つまり、辱しめた張本人を相手に、強姦罪で告訴するか、損害賠償の民事訴訟を提起するとかの手段にうったえて見たところで、いったん失われてしまった名誉は絶対に回復しないどころか、かえってこの不名誉を広く流布させる、いわば恥の上塗りの逆効果を生むからである。こうした際に、大概は泣き寝入りに終わるのはこの故である。

さて、この言わば凌辱事件をジンメルは、前記引用文の最後に述べているように、女性原理の貫徹を妨げている矛盾・衝突の一例として説明している。『女性の運命の形而上の様相』とは、換言すれば『女性的価値の男性的原理に対する内的独立性』のことであり、これを卑俗に言えば、「矢鱈な男には操をゆるさないという精神の独立性」を指す。『経験の様相』 (empirischen Aspekt) とは、現実の様相のことであり、すなわち『外的依存性』 (äussere Abhängigkeit) を指している。この場合の外的依存性を具体的に言えば、主として体力的 (物理的) 依存性と経済的依存性である。体力的に男に劣ることが凌辱事件の主要な原因と言えよう。結婚 (経済生活の保証) を理由に女を手込めにしたような場合は、経済的依存性からくると見られようか。なお、凌辱事件などよりも、それを説明する背後

の論理構造の方に大きな問題があるのではなからうか。ジンメルによれば、女性の経済的依存性を単に歴史的事実としてだけでなく、本質的なものと見ていらっしゃるらしいということである。というのは、第十二節（増訂版による^{註八}）で、女は活動（Tätigkeit）に対する欲求は持っているが、労働を本質とするもの（Arbeits-Wesen）ではないと述べているが、しかし夫婦関係においては、男女を問わず労働しない方の側が結局経済的に依存することになるからである。そこで、女の本質にしたがえば、妻の夫に対する経済的依存性（外的依存性）は妻の宿命ということになるわけである。したがって、ここでは凌辱事件だけについて敘述しているようであるが、それを説明する背後の論理構造の妥当する範囲には、女が経済力を欠くがために不本位な男と結婚する場合も含んでいると見てよいようである。これは大きな問題なので、つぎの段で述べることにする。

以上、女は習俗の世界に生き、その中に自由・生き甲斐を見出すものであることを見た。習俗の世界に生きるとは名誉の世界に生きることであり、名誉の中でも性にかかわる名誉は、女が一度凌辱されると、その事自体が絶対的なもので、もはや回復の方法があり得ないという特殊性の故に、この名誉は最高度に尊重されることをも見た。ジンメルによれば、これは形而上的には男性原理から独立している女性の価値が、男性への外的（体力的および経済的）依存性の故に現象的には貫徹できない女性の運命を示しているという。思うに、いわゆるジンメルの多原理主義と言われるものが、ここにも現われているのだと見ることができよう。すなわち、世界は諸々の形而上的原理・客観世界の法則の相剋の場合なのである。しかもこれらの諸原理・諸法則は末梢において相剋する場合もあり、初から広汎に（unfassend）相剋する場合もあるであろうが、この女性の運命は後者の『広汎に』（unfassend）相剋する場合と見ていいのである。その相剋・矛盾・衝突の波を受ける個体（女性）の立場から見ると、これは悲劇であると言える。警察力の発達した今日、殺傷・強姦・凌辱などの事件は大幅に減少したであろうし、そのことは女の体力的依存性からくる悲劇の広汎な克服を意味する。今日ではむしろ、大多数の女性が経済的独立を欠くために、不本位な結婚をしてい

ることの方が大きな問題で、近代のフェミニズムもその解決を最大の課題として取り組んでいるのである。しかしながら、シンメルによれば前段の最後で述べたように、妻の夫への経済的依存性は妻の宿命なので、したがってこの悲劇も宿命的ということになる。「戦や悲劇を生の本態と見る」^(註九)シンメルの立場からすれば、これもその一場面ということになるのであろうか。

(註一) 『』に囲まれた箇所が、原文のままを拙訳した部分である。

(註二) G. Simmel, *Philosophische Kultur*, Potsdam, 1923, S. 96.

(註三) Rousseau, *Emile*, *Everyman's lib.*, p. 350.

(註四) 拙稿「シヨーンペンハウアーの女性論」神戸女学院大学論集、第三卷、第一号、五八頁。

(註五) I. S. Mill, *The Subjection of Women*, *Everyman's lib.*, p. 305.

(註六) G. Simmel, *op. cit.*, S. 96 ff.

(註七) Rousseau, *Emile*, *Everyman's lib.*, p. 328.

(註八) G. Simmel, *op. cit.*, S. 80.

(註九) G. Simmel, *Lebensanschauung*, 1918, 道家忠道訳『生の哲学』筑摩書房、昭和十九年、三〇二頁。

二十

つぎは、世界像(世界観)の形成と女性像(女性観)の形成についてのシンメルの敘述である。

『ちてここで、全く証明のできないことだが、予感として感情として思弁として、全精神史を貫いている一つの形而上的前提が力強く現われてくる。その前提とは、人間というものは、自己の存在の中に深く沈めば沈むほど、そして自己の内部でこの存在に純粋な言葉を語らせれば語らせるほど、それだけ生存一般に近づき、世界統一一般に近づくと、それだけ完全に世界統一を自己の内部で表現することになる、という前提である。あらゆる時代の神秘説がこの確信の上に立っているばかりではなく、甚だ明瞭な、しかも互に対立している世界像、たとえば、カント

とシュライエルマッハー、ゲーテとショーペンハウアーのような人たちの世界像においても、この確信があるいは明白に、あるいは隠密に、種々様々に変化して働いているのである。その独特な、神秘的感情、それによって何時の時代でも女たちに対する態度の型が特徴づけられているのだが、つぎのようなおぼろげな知覚の中に、その感情の一つの表現可能な根拠を認めているのではなからうか。そのおぼろげな知覚というのは、この女たちは男よりも、しっかりと、より、完全に、より、まとまりをもって自らの存在の中に位置していること、また、彼女たちにはあっては、生成の不安も、行為の不安も、諸事物の対立の不安も、生存そのものの不安と同じように、男の場合ほど存在の実質的根拠に触れることがないし、その根拠を自分の中に引き入れることもしないこと、また、彼女たちはその固有の本質という最終法廷の中に深く沈みこんで、揺ぐことなく安らうていること、——つまり、このことによって、しかもこれほどまでに、生存一般の根拠が、別言すれば人生と世界との隠れて見えない統一が、彼女たち自身の生存の根拠となっているのだということ、そのようなおぼろげな知覚なのである。^(註1)』

以上引用の初めのところは、女性観(女性像)形成の基礎として、純粹哲学の領域のことを述べている。その中には余り耳慣れない用語もあるので、それについて言えば、まず『生存一般』の生存(Dasein)とは、ハイデガーによれば、われわれ人間のように自己の存在に関心をもつ存在者の意であり、ここではつまり人間存在の意である。なお、いわゆる「生存競争」の生存には、この語が使われている。つぎに、世界統一(Welteinheit)という用語は、世界(この場合は人間世界だけではなく宇宙をも包含する)が一つの秩序を保っているからには、その統一者または統一原理のようなものがなければならぬと考える立場から出た言葉である。つぎは世界像(Weltbild)という用語についてであるが、これとよく似た世界観(Weltanschauung)という用語(カントの『判断力批判』の中の用例が最初である)のことである(の方が人生観(Lebensanschauung)という言葉とともに、周知の通り日本人に好んで用いられ、耳慣れているのであるが、この両語は大体同義語と解して差支えないようである。ただし「世界観」の方は、ド

イツではナチス以後余り用いられなくなり、「世界像」の方が広く用いられているとのことである。なお、こうした意味合いから「女性観」も「女性像」も同義語として用いることにする。

以上のような用語の理解の上に立って、初の純粹哲学の部分を平易に要約すればつぎのようになるであろう。人間は自己の存在の内部に深く沈潜すれば沈潜するほど、生存一般・世界統一一般に近づくということである。これは古来の哲学者・思想家たちに共通な体験的感情とでも言うべきもので、証明のできない形而上的な大前提になっているというのである。そしてこの形而上的大前提の共通の確信の上に立って、あらゆる時代の色々な神秘説や哲学者たちの様々な世界像が形成されているのだと言う。このように、考える道筋というか道程というか、それが同じでありながらその辿り着いたところを言葉で表現したものが、何故に種々様々であるのかは説明のできないことなのであろう。ただし、神秘説というと、われわれはとかく根も葉もない仮空な荒唐無稽なものと考えがちであるが、大哲学者の世界像の形成と同じく、前述の形而上的大前提の確信の上に立つものであることを銘記しておく必要がある。というのは主としてこの神秘説から女性像が生れてきたからである。

さて、いよいよ女性観の形成ということになるのであるが、それに入る前にジンメルがここで用いている神秘説と世界像の両用語の意味を明らかにしておきたい。二つとも神秘的であることは共通であるが、その間に程度の差があるだけだと思う。つまり、世界像は『甚だ明瞭』であって、大体において哲学者・思想家などの著作の中で文字による表現をとっているに反し、神秘説の方は必ずしも文字による表現をとらずに、思想として社会に実在している点が違うのだと思う。ところが、女性観は世界像から演繹的に割り出されるというよりはむしろ、神秘説の方から生れている場合の方が多い、とジンメルは見ているようである。何れにしても、以上長々と述べてきたところから、女性観も結局は神秘的感情だということになる。しかし、ジンメルによれば、女性観の形成については、現実的根拠もあるのであって、それについて『つぎのようなおぼろげな知覚の中に、その感情の一つの表現可能な根拠を認めている

のではなからうか』と述べている。知覚 (Bewusstsein) というからには、それは経験的なものであり、たといおぼろげでも、そこに何等かの共通点があることになる。したがって、この知覚が各時代の女性観の共通点ということになる。よく「女性観は変らない」と言われるが、その理由はここにあるのだと思う。

その各時代の女性観の共通点ともいふべき、おぼろげな知覚とは何であろうか。それをジンメルは前記引用文に見られるように、種々の角度から分析して詳説しているが、それを平易に要約すればつぎのようになるであろう。女は男よりも、しっかりと一つのまとまりのある安定した統一体として、自分の存在の中に安らうていること、人生(生存)にまつわる種々の不安も、それを男のように深く掘り下げたりしないで表面的に受けとめて、男のように深刻に悩むなどということをしなないこと、と言えよう。さらに通俗的に述べれば、つぎのようになるであろう。男は世界や人生の真相をつきとめようとしてみたり、何物かに生き甲斐を見出そうとしたりして、常に外側の世界に押しかけては落ち着きのない生活をしているのに反し、女は世界や人生を深く考えたりしないで(考えても結局は徒労に終ることが女には分っているであろう) 小ぢんまりと自分の殻の中に、静かに安らうているのだ。この安らかな閉鎖性の中に生きる有り様については、この女性論の最後の結末でも繰り返されている。

つぎは、女の統一性(男から見て閉鎖性)が散漫な多元的生活に巻きこまれていく男に対して、それを統一させる役目を果たすことの次方を、哲学者らしく根源的に説明している。

『男は一般に自分の本質の二元性からみて、女を閉鎖されているものとして感ずる。男自身が、また文化とか運命とかが、女をも、そのような二元性の中に引き込もうとする度ごとにそのように感ずるのである。というのは、女においては、その本質の個々の部分が相互に対立関係を形成するなどということではなく、あらゆる個々の部分の底に存在する存在の統一性とも言うべきものが、直接に密接に結合した、まとまりの姿で現われているのである。さて、ここに注目すべき事柄がある。すなわちそれは、ある一つの生存が閉鎖されていること正にそのことが、その

生存の外部の世界全体または生存そのものを元素としているような世界全体へと向かう、もっとも強力な・象徴的または形而上的な指向を、それ自体の中に包蔵している、ということである。芸術作品がその定められた枠によって、突き破ることのできない制限を受け、そのことで事物の多様な散乱状態を免れているように、——正にそれだからこそ、芸術作品は生存一般の一つの象徴というところまで突き進んでいるのだが——そのように女というものは、分散した多元的生活の中に巻き込まれている男に対して、ある種の統一の役目を果すのである。はげしく振りがさすような動作・喰ってかかるような言葉・あたりを顧みずに自分からはみ出してしまふこと、こういったことが女にとって禁物になっているのは単に習俗の外面性からくるだけではない。このように、あらゆる野放図で大きな表現を避けること、つまり全存在を一箇所に集中しておくこと、それが習俗という形式に化したのは、おそらくあらゆる女の個々の心理状態をより深く、より一般的なものとして基礎づけている本質の閉鎖性ということが、歴史的表現をとったものであろう。』^(註二)

さて、ここでまた女心の閉鎖性が論述の主役を演じているが、いわゆる女心の閉鎖性については、すでに本研究で再三(第六節・第七節・第八節)述べたところである。もともと「閉鎖」という語は文字通り「閉じられた、鎖よぎされた」という象徴的・形式的概念であって、無内容である。強いて意味内容を盛れば「不可解・陰険・魔物・タブー・神秘的……」などがあげられようが、これらの意味内容はとかく価値判断を伴い易いので、それを避けようとして、そのような懸念のない「閉鎖」という言葉が用いられるようになったものであろう。この箇所の初めで述べている閉鎖性の論理は、男の二元性の観点から多元的なもの一元的統一体としての女を見るから、不可知・不可解ということになって女心の閉鎖性につながるのである。このようにしてジンメルは、その閉鎖性(統一性)を男が感ずる実際の場合について、さらにその詳細な論理を述べているが、抽象的表現で分りにくい点もあるので、実際に起ったロシヤの文豪トルストイの晩年における大回心に伴う家庭騒動の事実で説明を試みることにする。彼トルストイは「財

産・名誉・権勢欲・享樂欲」などはもちろん、彼の作品の著作権までもすべて罪悪であるとして、これを抛棄して、一介の水呑み百姓のの野良着姿になった。一方世間並みの（習俗に生きる）女である妻ソフィアは、それらのものが罪悪であるとか、貴族に生れて貴族として生活することが罪であるなどとはどうしても考えることができず、聖人百姓の女房であるよりは、伯爵夫人・世界的芸術家の奥様の方を選ぼうとした。つまり、女が信仰に入つたような場合でも、それとこの世の榮えとが『相互に対立關係を形成するなどということはなく』二つのものを、その底で統一的に保っているの、卑近に言えば「神と富とに兼ね仕える」いわゆる二股信者ふたまたであつても平気なのである。トルストイの夫婦仲はきわめてよかつたらしいのだが、財産抛棄となると何時も家庭騒動が持ち上つた。トルストイは言っている「自分に罪があるとは思えない。自分が變つたのは、自分のためでも、人のためでもなく、變らざるを得ないで變つただからである。お前が私についてこなかつたからといって、お前を責めるつもりはない」註三。つまりここで彼は自分の回心は『運命』であつたと言ひ、「妻がついてこない」というのは、ジンメルジンメルの哲学で言えば、分化のできない女心の閉鎖性（統一性）を実感する悲壯な場面である。こうした事例を宗教改革家マルチン・ルターについて言へば、彼が「わが妻子もとらばとりね」（旧讚美歌二六九番、第四節歌詞）と歌つたのは、彼が神の召命を受けて御許に馳せ参ずる決意をした時の悲壯な心境を吐露したものであろう。また卑近な例としても、実業家として儲けた収入をすっかり自分の好きな政治に注ぎ込んで、家計は何時も火の車であつた政治家の奥さんの愚痴を聞いたことがある。

ところで、注目すべきこととしてジンメルが取りあげていることなのだが、閉鎖された生存（*Dasein*）はその閉鎖が究極の姿・目的のではなく、その外部の世界、または他の生存の世界へと向かう、強力な・象徴的または形而上的な指向（*Anweisung*）を、それ自体の中に包蔵しているものと説くのである。端的に言えば、閉鎖されているものは時によってはその扉を開きたい指向を持っているものだという事になる。このようにしてジンメルは、閉鎖

されたものの実例として芸術作品をあげる。真正正銘の芸術作品がその鑑賞眼のない大多数の人たちに対しては隠された・閉鎖された存在であることは自明であろう。さて、閉鎖されたものとして芸術作品も人間の女性も同じ範疇に入れて論が進められる。芸術作品は一定の枠、すなわち方式（素材・型・その他の規約）に従って作られたものであるがために、つまり、すっきりした姿をとることによって、自然物などの雑多なものから区別されるだけでなく、それによって閉鎖の扉を開き、外部に働きかけようとしている。それと同じように、人間の女も習俗という形式に従って、すっきりした姿をとっている。これが散漫な多元的生活をしている男に働きかけて、一つの統一の役目を果たしているのだ、とジンメルは説明する。人間の男女関係においては、女が男に働きかけて男をすっきりした姿にさせる役目をするのである。あてもなく、うろついているように見える青年に向かって「早く嫁をもらって身を固めろ」というふうなことが、昔からよく言われたが、「身を固める」とは世帯を持って家計を維持するという習俗の中に、はまり込むことであって、ジンメルの言う意味を素朴的によく表現している。

さて最後に、繰り返し言うように女は統一的存在であり、それが結局は男をすっきりした姿にさせるという統一の役目をも果たことになるのだが、それが現実には習俗という形式を通して為させている。これは女の閉鎖性（統一性）が習俗という形式で扉を開いていることなのだが、このことは歴史的なものであろう、とジンメルは言っている。この歴史的とは、歴史的必然性があったことは明らかではあるが、そこに絶対性はない、すなわち歴史的要因が別であれば習俗とは別の形式もあり得る、という意味に解釈した。こうしたことは社会現象の深奥に考察を向けることで、ジンメルといえども決定的・断言的には言い切れず、『恐らく』（Vielleicht）と文頭でことわっているのはそのためであろう。

つぎにジンメルは、女には歴史がない、と言われていることを次のように説明している。

『このような統一的で、それ自身で始末のついている存在が——これはもちろん一つの理念的に絶対化した表現

なのだが——女たちを男たちよりも歴史のない存在にしている。けだし歴史とは、常に生成の歴史であり、流転の歴史であり、自己発展の歴史なのであって、諸々の本質の一つの複合体が、その諸要素は相対的には独立していないが、たがいに反撥したり、あるいは均衡をとったり、たがいに追い抜いたり、あるいはより高い綜合へと向かって突き進んだりする諸要素を包蔵している場合にかぎって成立するものなのである。男が女とは違う本質的な差異こそが、なぜ男は歴史を持ち、歴史を作ることができるかということの究極の根拠なのである。女性の本質は根源的に統一的なものであるから、必然的に非歴史的なものになってしまうのである。本質の分化した諸部分が相互に葛藤することから生ずる発展の原理も、女に対しては男の場合ほどには力を持たないのである。女には歴史がないということとは、少女の方が少年よりも早く「大人になること」に現われているだけでなく、つぎの外見的でも、もっぱら外部的な事実にも現われている。その事実とは、女の諸々の機能は文化の高度の発展段階においても、原始的段階における機能と、男の場合に對比してみても、さっぱり違つてはいないということである。(註四)」

この箇所は、女には歴史がないということの理由の説明であつて、その所説も分り易い。ジンメルはきわめて鋭敏な弁証法家として知られ、すでにその学的生涯の早期から弁証法を駆使していることは、本研究の序説ですでに述べた。またこの女性論の冒頭でも弁証法的原理を宣言的に述べており、これは男と女を弁証法の両極として捉える彼の方法论を掲げたものであるが、ここでは、彼の弁証法的歴史観が展開されている。すなわちジンメルによれば、事物の本質的な構成要素の間に、相剋・葛藤・止揚・綜合などのないところには、発展がなく、したがつて歴史もあり得ないことになり、そのような内部抗争のない統一的存在である女には歴史がないということになる。女が統一的存在であることは、すでに再三再四何度となく繰り返されて説かれてきたことで、そのことが前の箇所でも強調され、それがこの箇所でも引き継がれて、女には歴史がないことの根拠となつているのである。このようにして、女に歴史がないことは、男との本質的な差異からくるのである。

さて、女に歴史がないことの現象形態として、ジンメルは二つあげている。一つは少女の方が少年よりも早く「大人になること」である。女は内部抗争・止揚・綜合などというふうな、ややこしい精神構造がないから、早期に完成することは理解できる。同じように、ショーペンハウアーも「女は視野が狭い」ことの根拠として、女の早熟をあげている。^(註五)しかしこれだけでは女の肉体の早熟の方は説明できないわけで、肉体の早熟の方は別に説明する見解もあるが、ジンメルにおいては、精神と肉体とは互に照応したものであって、こうした問題について精神と肉体を別々に考察すること自体が誤りであると考えているのであろう。彼の用語『大人になること』(“Reifen”)は、精神・肉体共にの意味であろう。つぎに、女に歴史がないことは、女のすること為すことが、大昔も今もあまり変りがないことに現われているという。その変らない女の仕事とは、子供をほらみ・産み・乳を授け・育て・子供たちと自分の保護者^{プロテクター}の下で家計をきりもりし、つぎの世代に引き継ぐ機能などを指すのであろう。男の仕事の主流だけをとってみても、狩猟——農耕——サラリーマンの大群(ブルー・カラーも含めて)と大きく変わったことに対比すれば、よく分るのであろう。

なお、ジンメルは前記引用文のつぎに、あるシェークスピアに最も深く通じている人の言を引いて、シェークスピアの劇に出てくる男は、一つの歴史を持っており、道徳的に生長したり、道徳的に頹廢したりする、しかし、女の方は行動したり、悩んだりはあるが、生長したり、発展したりすることはめったにない、と述べている。これは劇中の人物の話で、歴史的事実ではないとしても、シェークスピアのような偉大な劇作家は人生の真実を語るものと見ることができるので、女には歴史がないことの一つの傍証となるであろう。

つぎは、女性の閉鎖的神秘性が大宇宙の神秘性と直結し、そこから祝福や呪詛がもたらされることについてのジンメルの叙述である。

『芸術作品が、世界全体の一部であるにもかかわらず、その閉鎖性によって、世界全体の模型となって、芸術と同

じような方式を持っている一種名状しがたい形而上的なものの方へとわれわれの目を向けてくれるのと同じように、女性の本質が持つ閉鎖という方式もまた、古来大宇宙の象徴という、香気を女性の上に吹きかけてきたのである——あたかも女性というものが、把握し得るあらゆる個物を超えて、事物一般の根底にまたは事物一般の総体に、何らかの關係を持つてでもいるかのようなのである。女に対するあらゆる侮蔑や虐待と並んで、原始民族以来全文化の系列を貫いて現われているのは、女は、単なる女、すなわち単に男と關係を持つ存在、以外の何物かであるという感情である。なるほど女が男と關係を持つ存在であることは明らかだが、そうした感情の故に、女たちは巫女みことして魔女として、つまり、事物の何時も触るべからざる深奥からの祝福や呪詛がもたらされるような存在として、数々の秘密の力に關係を持つようになるのである。であるから、われわれは女たちを神秘的に崇敬し、用心して避け、あるいは魔神として呪わなければならぬ、というわけである。(註)」

本研究の最初のところで述べたように、この女性論はジンメル晩年の作『哲學的文化』の中の一章であり、彼の學的生涯の晩年の特徴とされる形而上學的・神秘主義的傾向が、この辺りに最もよく現われており、彼の女性論もいよいよその最高頂に達していると見ることができよう。まず『藝術作品が世界の一部である』とは、世界の一部である人間が、同じく世界の一部である素材をもつて構成したものであることから出た表現であろう。一方藝術作品が閉鎖されたものであることは本節の前のところすでに述べた通りであるが、ジンメルによれば、世界（この場合宇宙と同義）もまた閉鎖された存在であるので、藝術作品は世界の模型（Gegenstück）ということになる。そこでわれわれが、藝術作品の持つ方式を媒介として藝術価値（美的価値）の認識に到達できるという経験から、藝術と同じような方式を持っている形而上的なもの（自然美だけとはかぎらない）へと、われわれの目を向けてくれるという。一方これと同じように、世界（宇宙）も女心も閉鎖されたものである点において同一の範疇に属し、女は言わば、世界の模型ということになり、女は大宇宙の象徴ということになる。『大宇宙の象徴という香氣（Hauch）を女性の上に吹

きかけてきた』などという表現は、いかにも女性をその絶頂にまで祭り上げた讚美の言葉のようにも聞こえようが、これは彼の主観によるものではなく、あくまで歴史的・客観的事実であると述べているのである。このことの端的な証拠は、造物主 (Nature, Natur) は女神と考えられ、言語上も女性名詞扱いされていることではなからうか。

なお右の引用文中に『女性に対するあらゆる侮蔑や虐待』とあるが、これは、男性的価値判断にすぎないものが男性の社会的優位によって、普遍的に人間的なもの(男女共通のもの)として女性にも押しつけられ、女性原理の独立性は認められないことからくる結果であることは、第四節後段で述べたところである。さて、女は大宇宙の象徴であるとは、別言すれば、女は宇宙の神秘性と直結した存在であるということであり、卑近に言えば、女は魔物であるということになる。したがって、そこから場合によっては祝福 (Segen) が、場合によっては呪詛 (Fluch) がもたらされることになる。これら二つの体験のうち祝福の方面を文字にしたものが、日本ではどうも少いような気がする。これは、日本の文学は自然の美しさが出発点になっているとか、日本では性が解放されなかったからとか、色々説明もあるようであるが、とにかく女から受ける祝福の例証としてつぎの一つを挙げておきたい、「一人の女性の愛に清められて、私はやっと自己を得た」。これに反し、呪詛の方面については無数と言ってもよいようで、第四節前段の実例としても少々あげておいたが、その他思いつきものとして「振られて帰る果報者」、「十人の男子七人の女子をもうけたりとも妻に心をゆるすな」などがある。一方西洋文化は女性文化であるとか、西洋の美術は女の美しさからインスピレーションを引き出す(林語堂)とか言われているように、西洋では祝福についてのものが無数のようであるが、呪詛の面についてのものと、それぞれ一つづつを例証としてつぎに挙げておくことにする、「すべての財宝の中で最高なのは女の美しさ。けれど女の誠はさらに称讚に値する」、「女の愛を怖れよ。この幸福、この毒を怖れよ」。

(註一) G. Simmel, Philosophische Kultur, Potsdan, 1923, S. 98 ff.

(註二) *ibid.*, S. 99 ff.

(註三) 中野好夫『人間の死にかた』新潮社、昭年四十四年、四三頁。

(註四) G. Simmel, *op. cit.*, S. 100 ff.

(註五) 拙稿「ショーペンハウエルの女性論」(中)神戸女学院大学論集、第四号、二九頁。

(註六) G. Simmel *op. cit.*, S. 101.

二 十 一

つぎは、この女性論の最後であるが、男女両性の把握は、男女の身体の類型とかその他科学的研究だけでは不十分で、形而上的な把握を必要とするとし、その立場からのこれまでの叙述の総まとめである。

『私は、生の充溢をせきとめて一つの相称的シメトリックな(男女の―筆者註) 区分の中に押し込めようなどとは、毛頭考えてもいないのだ。しかし、今ここで生きた現実がどんな姿をしているかを追求しようとして、さし当りまずその解剖学的構造を会得しようとしても(そのわけは、骨格が丁度例の類型的な相称シメトリックを示しているからであるが、それに生理的な過程が加わると今度は、この相称を、単純に同列におくことではもはや把握できないような無限に複雑な生の活動に高めてしまうのである)——男女両性の関係は、それを通して男女は相互に相手の特性を授けられるわけなのだが、つぎに述べる二重の絶対的なものに取り巻かれているように見えるのである。すなわち一方の側には、絶対的なものとしての男性的なものが立っており、それは男性的なものを超えたものであり、それは客観的なものである。ここで言う客観性とは、あらゆる主観性・あらゆる対立関係の彼方にあり、二元論の犠牲を払って獲得された規範的な高みを意味する。他方の側には、絶対的なものとしての女性的なものが立っている。それは、人間の諸

々の本質の総体を、さながら主観・客観の分離前の状態で、実質的な・平穩な閉鎖性の中に保持しているのである。^(註1)

右に引用した文章が、ジンメルの女性論の最後の結末となっている。初めに『生の充盈 (die Fülle des Lebens) をせきとめる』という表現が出ているが、その意味は彼が何よりも「生の哲学者」であったことから想像して把えるより他にない。つきに出てくる『相対的な区分』とは、シンメトウリ (Symmetry) は通俗的には、左右同型とか左右均衡の意味に解されているが、ここではもっと広い概念として用いられており、この箇所での意味を手っ取り早く言えば、男女を同一平面上に並べて、相称的に、大小・高低・重い軽い・太い細い・強弱・硬軟・剛と柔・主従などと同分することを指している。したがって、その区分の中に押し込めるとは、一例をあげれば、女は、小・細・弱・軟・柔等々が生命だから(瓜実顔に柳腰・撫肩・富士額)、スポーツなどをやるのは好ましくない、とするが如きである。ジンメルにしてみれば、そのような平面的な・相称的な観察の結果にすぎないものを男・女に押しつけて、生命の躍動を窮屈な枠の中にはめ込もうとする気は毛頭ないというわけである。

それはそれとして、男女別の生きた現実の姿をとらえようとして、男女の骨格がシンメトウリの観点をよく示しているというわけで、男女の解剖学的構造をつかんだとしても、そうした平面的観察が無意味だとは言えないにしても、それによって男女の特性の差異はつかめない、というわけである。つきに生理的な過程が加わってくると、もはや男女シンメトウリの観点からは把握できない無限に複雑な生命現象が現われてきて(男にも女性ホルモンがあるなどということも、そのほんの一例であろう)、そこから男女の特性をつかむなどということは到底できなくなる。以上を端的に言えば、自然科学的研究方法では男女の特性を認識することはできないことを言っているのである。

さて、しからば、男女の特性 (Eigenart) はどうして把握できるのであろうか。ジンメルによれば、『男女関係を通して相互に相手の特性が授けられる (sich gewähren)』と云う。これは形而上的に感知されるという意味であ

らう。ところがこの男女関係は、絶対的に男性的なものと絶対的に女性的なものとの、二つの絶対的なものに取り巻かれていたように見える (scheiden) と言う。すなわち、このことを断言的には言っていないのであるが、ジンメルはこの二つの絶対的なものを述べることによって、この女性論の最後を結んでいる。

その二つの絶対的なものとは、すでに述べられたことの一部繰り返しであり、総まとめでもある。男について言えば、それは男性的なものを超えたものであるとは、男は人間の男から離れた理念的な存在だということである。すでに『男は理念のために生き、理念のために死ぬ』(第十三節) という表現があった。また前節の引用を省略したところでは、はっきりとつぎの通り述べている『女の特異な絶対性は彼女を存在の統一の中に沈める、ところが男の絶対性は彼を存在から理念へと引きさらって行く』。このことは男の自己離脱(第七節)の傾向からきているとも言えようし、これについては『男はわが「家」をわが身の外に持つ』(第十三節) という表現もあった。旧約聖書の箴言に「自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる」(第十六章三十二節) とあるが、「城を攻め取る」(外側の世界に出かけて行く) ことが、昔も今も変わらない男の宿命なのであり、「自分の心を治める」ことは、女が正常である限り、治めなくともすでに治まっているのである。哲学的表現をかりれば、男は他在 (Anderssein) の存在 (女の向自的存在に対し) ということになるであろう。

ところで、男が理念の世界に生きて到達した境地は、ジンメルによれば『規範的な高み』(normative Höhe) であるが、これが再三述べられてきた男の二元論の克服によるものであることは言うまでもない。これは男は『半は獣、半は天使』(第八節) の獣が殺されて、天使となった姿であろう。それよりも「世の中に女さえいなかったら男は神様のように生き得よう」という言葉が、よく事の真相と現実の姿を物語っている。

さて、男女関係を取り巻く二つの絶対的なもの他方は、絶対的なものとしての女性的なものである。それは人間の諸々の本質の総体を保持する (tragen) ことである。つまり、女は人間の枠からはみ出さずに、あくまで人間とし

て止まらうとするのである。これは社会学者ウォード (L. F. Ward) の所説とも一致する。ウォードによれば、単性生殖では個体の数が殖えるという量的発展だけしか見られないので、そこで造物主は種族の質的発展をも意図して、男女を交配する両性生殖という方法を案出したわけなのだが、その場合、男には進歩の部面を担当させ、女には人類種族の本質の守護者たる役目を負わせたのである。^(註三) こういうわけで、人類種族進化の観点から言っても、女性は人類の保守派を代表する。

つぎに、人間の本質を『主観・客観の分離前の状態で』保持することについては、少しく説明を要する。すでに第十七節の女の倫理観のところでも、また第十九節の男女の定義のところでも述べたのであるが、ジンメルによれば、人間社会の「言葉」は主として男性の思考様式・概念形成の産物であるので、彼が、しきりに用いる女性的存在の統一性という表現なども、男性の思考様式である二元論に従って、存在 (Sein) と当為 (Sollen) の未分化・主観と客観の未分離・客観性の欠如などと否定的に表現されているわけなのである。ところがここで注意を要することは、分化 (Differenzierung) とか分離 (Trennung) とかが通常発展の原理と考えられ、(前節の女には歴史がないこと) の理由もこの原理によった) したがって未分化は未発展・未発達・素朴・幼稚を意味するところから、女を男よりも一段と幼稚な・劣等な存在と見る見解が広く行われていることである。例えばショープンハウアーが、女は「一生大きな子供」^(註四) (zeitlebens grosse kinder) と評したのは有名である。これはアンティ・フェミニストたちの拠点なのだが、この問題に対するジンメルの深い洞察は、別章「女性文化」(Weibliche Kultur) の中に見られる。^(註四)

つぎは、女が人類の本質の総体を保持する状態についてである。まず『実質的な』(substantiell) とは、家庭の様々な仕事を取りあげてみても、女のすることゝ為すことがそれぞれの価値を実現し、女は充実感の連続である(退屈がない) という意味に解した(これについてはすでに第十四節で詳述した)。つぎの『平穩な』と訳された原語 (ruhend) は、語源的には「休む」(英 rest) の意であり、ここでも他に、静止・平靜・平和・平安・安静・安心・

安息・泰然・落ち着きなどとも訳され得る言葉で、これについてもジンメルがすでに再三説いてきた通りである。この女性観は日本人の女性観ともよく一致するもののように、それが女の「名前」に現われており、筆者の思いつきだけでなく次のようなものがある、静子・安子・泰子・靖子・保子・和子・悦子・治子・窈子など。なお、これと同系と考えられるものに、容子・寛子・弘子・浩子・裕子などがある。最後にジンメルによれば、女は人類の本質の総体を以てきたものではあるが、これはどうも分りにくい概念である。というのは、一方では女性特有の明るさ・快活さ・晴れやかさ(serenity)が一般的事実として認められており、その根源について説明した学者もあるほどなのに、他方、閉鎖からは陰険が想像され、明るさと矛盾するようである。理解が困難になってくるからである。これについて筆者は、よく言われる「女には友達ができない」を手がかりとして、この点からも説明を試みることにする。女同士はいかにも親しげに語り合い、手を取り合って楽しんでいるが、友達とはそうしたもので、それで結構だとしている。別に内心(真底)を打ち明ける友達など初めから必要がないのである。「女には友達ができない」の友達とは、いわゆる内心を打ち明ける「心の友」(bosom friend)の意であって、女には、そうしたバザム・フレンドなどがないのは当然の話である。女は向自的な(für sich)存在であるから、男のように何人かに内心を打ち明けたたりしないでも、平然としていられる。前節で、男の二元論の立場から女の統一性を眺めて閉鎖されているように感ずる、というジンメルの説明があったが、こういう内心を打ち明けないとも平気でおられることから、女心は男の目には閉鎖されているように見えるのだと思う。序に思うことは、よく「東男に京女」と言われているのに、その京女が「真底知れない京女」なのだから、閉鎖された神秘性がかえって魅力を發揮するようでもあり、さては女性論は一筋縄では把握まらない。

(註一) G. Simmel, Philosophische Kultur, Potsdam, 1923, S. 102 ff.

(註二) L. F. Ward, Pure Sociology, 1921, p. 325.

(註三) 拙稿「ショーペンハウエルの女性論」(上) 神戸女学院大学論集、第二号、三〇頁。

(註四) G. Simmel, op. cit., S. 274 ff. 阿閉吉男訳『ジンメル・デュルケム』世界大思想全集、第十六卷、河出書房新社、

一三六頁以下。

× × ×

婦人問題の学徒は万屋よやでなければならぬという宿命から、世界第一級の哲学者の文献まで手がけなければならなかった次第である。そんなわけで真向からこれを論評できる柄でないことは自明なので、以下少しく感想のようなものを記して、結びの言葉とする。

すでに前にも(第十一節、第十三節)一寸触れたように、ジンメルに対してはルカーチなどの「帝国主義下の利子寄食者のイデオロギー」と、いうふうな唯物論的批評があることを述べた。たしかに、そう思えるところがある。たとえば、『女は手段的存在ではないから、女はまた労働を本質とするものではない(女によく見られる「活動」に対する要求と取り違えてはならない)——この「大自然の志向」は、すべて持続的できびしい労働は女を醜くさせてしまうのに、男にはそれが起らないということにおいて明瞭なのだ』(第十二節、女の悲劇、増訂版)などである。また、古来閉鎖された女性の神秘性が神秘的大宇宙の象徴という香気を女性の上に吹きかけてきた(15頁)、などという表現も歴史的事実の形で書かれてはいるが、随分と女を祭り上げた支配階級的な女性観のような気がする。また、男は理念のために生き理念のために死ぬことも充分あり得るとか、理念とは男にとって永遠の課題であるとかいう男性論も知識階級的ないし一部特権階級的イデオロギーのようにも思える。以上のようなものがあるからと言って、一網打尽にブルジョワ・イデオロギーだと決めつけてしまう態度は許されないとと思う。ジンメルは一々根拠を上げて述べてい

るので、その根拠を取り上げて論評するのではなく、その根拠そのものがブルジョワ・イデオロギーだと云うのかもしれない。そうすると「社会的存在がその意識を決定する」というふうな唯物論的見方そのものの妥当性が問われてくる。なお、ジンメルには数々の疑問がある。たとえば、女は活動には向いているが、労働には向かない、という場合の活動 (Tätigkeit) と労働 (Arbeit) とをどのようにに區別するのであるか。また、現代社会においてでは理念のために生きる男などというものが、果たして何人いるであろうか。高度資本主義下における大多数の男は、いわゆる自己疎外にかかって、肉体的には男でも精神的にはもはや男ではなくなっているであろうか。それとも、もがきながらも何等かの理念を追求していると見るのであろうか。その他数々の疑問については、本研究の序説のところでも述べた一時間の講義を二頁で書いた、ことを想起する必要がある。いわばジンメルは、十を知って一を書いたのであるから、九は隠れている。その九に対しては、生きたジンメルに直接聴きただすか、それとも彼の叙述に合致するように適宜解釈を加えるより他はないと思う。

たしかにジンメルは、女の立場に立って女を見た。男でありながら女の立場に立てるものであろうか、と疑問に思われる方もあるかも知れない。しかし、それは可能である。この場合、認識主体にとっては、人間の女といえども客観世界の一つの個物にすぎなくなるからである。それにしてもジンメルの学的態度が徹頭徹尾即物的 (客観的) であるのには感嘆した。彼は「物の心臓の鼓動」を聴くことのできる第一級の哲学者であると自認したその言葉通り、「女の心臓の鼓動」を聴きかけたと言えよう。また、彼が言った「哲学者は万人の知ることを語る人間でなければならぬ」という言葉通り、女について世間の人達がよく言うことを究極的に説明した。哲学者が客観的に物を見るのは当然のことだが、対象が「女」となると、それは主として男女関係を通して把握されるものだけに、そして哲学者も血の通った男であるからには、どうしてもその客観性に曇を生ずることは免れがたい。したがって、男の御都合主義の女性論も生まれ易いのであるが、そうした形跡はジンメルには微塵も見られない。

つぎに、ジンメルの女性論を研究してみても感ずることは、男と女とは本質的にはどうも違った存在なのかということである。したがって男女の關係（夫婦關係をも含めて）も、それぞれ別個のいわば独立王国の接觸ないし接着であつて、決して融合ではない。これは男女を弁証法の兩極とする考え方とも一致する。これはまた人間は究極は孤独なものであると説く多くの識者の所説とも一致する。「夫婦は一心同体」とか「夫婦は二世」（二世をちぎるもの）とかは、離婚は出来るだけ防ごうとした「教え」にすぎないように思われてくる。男女それぞれ独立の王国とは言つても、女の方が大宇宙と同じように閉鎖された小宇宙を形成し、独立王国の名にふさわしい。男は分化・發展し、社会のあらゆる方面に活動し、社会的優位を保っているにしても、所詮は人類に貢獻する手段的存在にすぎず、人生の正味は女に喰われているような気がしないでもない。

世界で最も深く最も真剣に女を考え、女を愛し、女から呪もうけたであろうが、女から恵みや救いを受けようとしたのはドイツ人ではなからうか。こうしたことについて、イギリスの歴史家ギボンもつぎのように述べている、「ドイツ人は尊敬と信頼の念をもって妻を取り扱ひ、重大な折りには何時も相談をかけ、彼女たちの心の中には神聖なもの・人間以上の知恵が宿されていると信じて、いとおしんだのであつた」^(註)。女や恋愛について書いたものも多いようである。筆者の寡聞でも、シヨーペンハウアー・ゲーテ・シラー・コーエン・リッケルト・ヴァイニンガーなどがある。「美しき魂」を説いたシラーもさることながら、ゲーテのファウストの最後が「永遠に女性的なもの」(Das Ewig-Weibliche)とどう謎のような言葉を残して結末となっているのも有名である。ジンメルもその中の一人であつた。

女性論の勉強は女にとって必要である。それは自分の中にある本質的なものと歴史的なものとをかみわけて、時代の潮流に巻きこまれない女としての高い人生を生きるためである。それにもまして女性論の勉強は男にとって必要である。女を知るためにも、男を知るためにも。というのは、「愛を優しい力と見くびったところから、生活の誤謬

は始まる」。「図書館いっばいの本を読むよりも、一人の女を読むことの方がより多く男を賢明にする」などという言葉が、どこからともなく耳朶を打ってくるからである。

(註) John Langdon-Davies, *A short history of women*, 1948, p. 155.

A Study of G. Simmel's View of Womanhood

(6 = the End)

Résumé

Woman lives in the world of conventions, in which she finds freedom. On the contrary, man finds it outside such a world. Thus her sexual honor receives the highest estimation, the loss of which is never to be restored.

Man considers woman as a closed being, because from the viewpoint of a pluralistic being she is regarded as a unified being. This closed being expresses itself in the form of usual customs, which uniformizes man's pluralistic, rambling life.

It is generally said that woman has no history. According to Simmel, history is always the history of development which comes from the conflict among elements in things. That is to say, woman's unity consists of one element, and there can be no conflict such as mentioned above. Hence no development, no history. This has been observed, through all the ages, in the invariability of her functions in society.

The closedness of womanhood has endowed her with the fragrance of a closed and mysterious universe. Therefore, as blessing has been brought about by woman, so has been curse, from which we must prudently avert.